

【休止】 平凡な学生ライフを望んだら……

[お燐]

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

【諸事情により「この作品」は休止いたします。もし、楽しみに待つていた方には申し訳ないです……理由としては、他に書きたい作品が出来てしまつたで、その作品を書き終わつてから、再度投稿しようと思つております】

テンプレのごとく転生し、テンプレのごとく得点を山の様に貰つた主人公が、なんやかんやしながら楽しく学生ライフを送る物語です。過度な期待はしないで――何をする！ やめつ……アア―――

!!

この小説は私の妄想で出来ております。

その為、ストーリーとか無いです。

それでも良ければ見てください。

## 目 次

何時だつて未来はわからないものですよ	1
探られるのはあまり好きでは無いですので、早々に種明かしです	5
<b>【キヨン視点】 長門お!! お前つてそう言う性格だつたのか!!</b>	11
お泊まり会……準備編	15
お泊まり会……行動編	19
お泊まり会……食事編	23
お泊まり会……始動編	27
お泊まり会……収束編	31
お泊まり会……花火大会編……?	37
お泊まり会……戦闘終了編	42

何時だつて未来はわからないものですよ

「東中出身、涼宮ハルヒ。 ただの人間には興味ありません。 この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら、私のところに来なさい。 以上」

あの人は誰よりも綺麗は声で、誰よりも頭おかしんじやないか？と疑いたくなるような事を言つた。

あ、ども。 はじめまして……かな、 天草あまくさ 時音ときね だ。

今日から此処…北高に通う事になりました。

…………え？ 誰かに似ている？

気のせいですよ？

さて、今は入学式恒例？ の自己紹介的なのをやつっています。  
(出だしで少し中二病患者予備軍が居ましたけど気にしてはいけない。 今後の私の平和な人生の為にも！ 気にしてはダメ)…………してたんだけど

「な、何かな？」

「……綺麗だ、お付き合いを前提に結婚しちゃう！」

ドゴツッ！

「いやー、ごめんね？ 僕の友達友達<sup>変態</sup>が目を汚してしまつて」

「い、いえ……お気に為さらず……」

つてか、人体から出てはいけない音が聞こえたけど……

「そう言つてくれると助かるよ、ほら、そんな所で寝てないでさつさと行くよ？」

ズガガガガカツ!!

「痛つ!? やめつ……痛いって！」 引つ張るな!!

「だつたらさつさと立つてよ？ 僕だつて君と一緒に居て変な目で見られたくないんだからさ」

「……今日のお前は、なんか毒舌だ……」 グスン

あ、あはは……入学早々なんだか疲れるね

まあ……これも最初にしか味わえない事だし―――忘れよう

…………うん、 あの人の為にも 髮毛をピシッと決めてる人

それから、なんやかんやあつて……数週間たつたある日、あの日か  
ら友達の国木田さんと谷口君とで一緒に帰ろうとした時だつた。  
校門でバニー姿で何かをやつてゐる……人を見つけた。

「あの人つて……」

「ああ、十中八九涼宮だろうな……しつかし、バニーの服なんてきてビ  
ラ配りたあく乙なものだね」

「大丈夫？ 死んでみる？」

「酷くないかな？ ねえ！」

「まあまあ……ん？『SOS団、入部者募集中』だつてさ……何する

所何だろうね？」

名前からするに救助とかするのかな？ お年寄りとか助けたり？  
だとしたら以外といい人？

「多分だけど、涼宮さん本人が楽しむ為の集まりなんじや無いかな？  
彼女は昔からそう言うことをしてきたつていつてるし」

「ふうん……」

なんだ、楽しむ為……か、私には無縁な話か

「あら？ ねえねえ！ あなた私のSOS団に入らないかしら！」

「うえつ!!」

「良いわね！ そのリアクション!! 決めたわ、あなたを私の団に入  
れるわ!!」

「ええ！ そんな急に言われても……」

「つて！」

なに二人してちやつかり安全地帯にいるのさ！  
しかも、諦めろ的な目線まで！

「よし！ 着いてきなさい！」

「へつ？ どこ——にイイイイイイ!!??

手首！ 手首痛いんだけど！ それよりも引っ張らないでエエエ  
エ!!

「さあ着いたわ！ 此処がSOS団の部室よ！」

そこに見えるのは文芸部と書かれたプレートの上から白い紙にSOS団と手書きで書かれた物が貼られていた。  
どう見ても文芸部の部室です。

本当にありがとうございました。

「はあ……ハルヒ、また誰か連れてきたのか？ ……って、同じクラスの…………誰だっけか？」

「あ、天草時音です」

「そうか、俺は——」

「キヨン！ なに悠長に自己紹介なんてしてるのでよ！」

「あのなあ…………そもそもなんでまた」

「なんとなくよ！」

「はあ…………やれやれ」

な、なんだろう…………私の安全で安心な未来がものすごい音を立てながら壊していくのがわかるよ……

ああ、パトラ○シユ…………私もう疲れたよ…………

「あ、あのお～…………お茶飲みますか？」

「へつ？ あ～…………お願ひしても良いですか？」

「はいっ！」

な、なんとまあ…………お茶一杯でそこまでいい笑顔になれる人は知りませんよ？

「それより…………此処は何をする所なんですか？」

「あ、そう言えば言つてなかつたわね…………SOS団とは！ 宇宙人や未来人！ 異世界人や超能力者を見つけ出して一緒に遊ぶことよ！！」

「は、はあ～……」

う～ん…………この枠の中に『私』は入つて無いですね。

「まあ…………なんだ、同じ巻き込まれ同士で仲良くしてくれ」

「あ、はい。 よろしくです」

それにしても……未来人の所でお茶をくれた人が少しごくつて  
なつたけど、笑いを堪えて……いやいやいや！　お茶を貰うだけ  
で花のような笑顔を浮かべる人に限つてそんな事は——

……パタン

「あら、もうそんな時間ね……鍵よろしくね！」

「あいよ……さて、俺達も帰るか」

「まつて」

…………全然びつくりなんてしてないですよ？　ええ

「ん？　どうした長門？」

「……」ジイー

「？　どうかしましたか？」

…………なんだろう？　私の顔なんて見て……あ、お昼のご飯でも着いてた  
!?

…………確認するもその様な跡は無し、じゃあなんだろう?  
「長門、喋らんと伝わらないとおもうぞ？」

「…………あなたは、何？」

「へつ？」

「質問を変える……あなたは何者？」

探られるのはあまり好きでは無いですでの、早々に種明かしです

「質問を変える、あなたは何者?」

「ここにちは、天草時音だ。」

さて……どう答えようかな、

転生者ですなんて言つたつて信じないだろうし、そもそもなんで分かるの?」

「長門、どう言う事だ?」

「この存在は、何一つ伝えられていない。 私自身でも干渉が不可能え? 干渉って何? なにかされるの?」

つてか、キヨン?さん、そんな変なものを見るような目で見ないでくれませんか? 泣きたくなります。

「ええつと……取り合えず人間だよ?」

半分だけどね

「…………そう、帰宅する」

「な、なんだろう…………」

「…………まあなんだ、俺達も帰ろうぜ」

「あ、はい」

多分、キヨンさんは苦労人なんだろうね……それでも関わってる辺り、お人好しなのかな?

……ま、いい人なのに変わりはないんだけどね

そんな事を考えながら部室を後にして、廊下をキヨンさんと二人で歩いていると、ふと気になる事が出来た。

「そう言えば、SOS団つて私とハルヒさんと長門さん、朝比奈さんにキヨンさんで全員ですか?」

「いや、もう一人居る……が、あいつの事はその時でも良いだろう

「ふむふむ……あ、私はこっちだから」

「…………俺の勘違いじゃなければ、そつちは高級住宅街だつたはずだが

？」

「ん？ あつてるよ？」

地元の人じやないのかな？」

「……まあ良い、じやまた明日な」

「はい、また明日」

んく……あ、食材切らしてたんだ……買いに——いやめんどいし『造り』ますか。

何にしようかなーと考えながら家に着いた時、目の前に黒い車が止まつた。

「へつ？」

「あなたが天草時音さんですね？」

「え？ あ、はい。どちら様ですか？」

「古泉一樹と申します、少しお話でもよろ「おや？」し……い？」

古泉一樹と名乗る青年とその他の人達の後ろから……つまりは私の家の玄関がお父様こと天草<sub>あまくさ</sub><sub>そうじ</sub>総司さんが立っていた。

「あ、お父様。ただいま戻りました」

「お帰りなさい。……さて、儂の娘に何をしている？ 答えによつては……わかるな？」

バキツ！

……お父様、私の目が可笑しくなったのか、手に持つてているのはバールの様なナニカですよね？

それがポツキリと折れてるのはキノセイデスヨネ？

「ガクガクブルブル

「儂の娘に何をしているのかと聞いておる、答えよ」

はあく……お父様、そんなに威圧しなくても良いと思ひますよ？

「お父様、そこまでです。『霸氣』を仕舞つてください」

「しかしだなあ……」

「おとうさま？」

「……わかつた。運が良かつたな若造、だが……」

次は無いぞ

「

「あ、息してないですね」

「古泉イイイイイ!!?」

「くつ！ 此処は一端引くぞ！」

「おう！ 去らばだ！ また会おう！」

……行きびったりだね、動きからなにまで。

「では、私は部屋に戻つて居りますので」

「うむ、何かあつたら言うんだぞ？」

「ふふつ、わかっていますよ」

さてさて、高校卒業までの勉学はもう終わつてるし……日記でも書こうかな……

『 5月2日 晴れ

今日は、ハルヒさんがやつている？ SOS団と言う所に入る事になりました。

そこで、長門さんから「何者」かと聞かれ少しごつくり！

でも、いい人が居るし、今日会えなかつた人ともあつて見たいかな  
？』

よし、こんな物かな……

後は晩御飯食べ……て……？

「ああ!! 食材!! ……明日にしよう、うん」

すつかり忘れてたよ……気を取り直して、お風呂に入つて寝ます  
かね。

♪お風呂に入つてます♪

「はあ～……大きくならないい～…」

胸が未だに小さいつす

大きい胸を見ると少し……ほんの少しだけ貰いたくたるつす

…………むなしいつす

「ねよ…………おやすみなさい

そして夜が明け、さらには放課後になつた  
(え、どばしだぎ? 気にするな!)

「こんなに……ち……は……?」

「ん? どうしたのよ?」

「え? あく……いえ、知らない人が居てびっくりしただけです」

知らない人……てのは嘘になるけどね、厳密には昨日家の前であつ  
てるし

「あ、それもそうね。古泉君、自己紹介しちゃいなさい」

「こ、古泉一樹と申します」

「天草時音ですか? それよりも大丈夫ですか? 汗がすごいのです  
が……」

「大丈夫……です。お気に為さらず」

「ん? 昨日あつた人だよね?」

随分と印象が違うような…………氣のせい?

「あ、ねえねえ。時音の役職を決めようと思うのだけど、皆は何か案  
があるかしら?」

「そうですね……時音さんは何か得意な事はありますか?」

そう古泉さんが言つてくるので考える……

『能力』を使つたらそれこそ出来ないことはあんまり無いんだけど、使  
わないとなると…………料理?

「マジックとか料理とかですかね」

「マジック……ですか?」

「はい……例えば、此処にコインがありますよね?」

はいと言つたのは興味津々で見ている朝比奈さん

……因みに長門さんは本を読んでいて、その他の皆さん私が私の方を  
見ています。

「そして、机の上にハンカチ、コインの順に乗せます……すると」

「わっ！ 浮かんります！ どうやつているんですか!?」

と、こんな感じに浮かぶ訳です。

因みに妖りょ……不思議な力を使って直接浮かせてるのです

え？ 妖力？ そんなこと言いましたか？

気のせいですよ

「企業秘密です♪ ……と、こんな感じのマジックが出来ますね」

「……すごいじやないの!! 種とか全然わからなかつたわよ!!」

「確かに……これ程の腕前ならばプロと言つても過言ではありませんね」

「すごいな……将来はマジシャンとかになるのか？」

「いえ、ただ誰かが暇になつてて楽しみたいと言う時に位ですから」

そこまで考えていませんよ と言い、コインとハンカチを鞄の中に仕舞う。

「うーん…………あ！ 秘書に任命するわ！」

「秘書…………ですか？ 因みに何をすれば良いですか？」

「定位置は有希とは反対の……そうね古泉君の隣の此処にしましようか……で、仕事は、皆が退屈になつたときにマジックを披露するのはどうかしら？」

ふむふむ……『妖力』なら切れることがないし、たとえ切れたとしても『魔力』や『神力』があるから気にしなくて良いかな？

え？ ふふつ……き の せ い ですよ？

「……はい、それなら大丈夫ですよ」

「うん！ なら決まりね！」

ねね、所でさつきの他に、何か出来たりする？

「他にですか？」

「うん……例えば、摩訶不思議な事よ」

「うーん……私が出来る事には限度がありますから……ハルヒさんの期待に応えるかはわかりませんが、出来ることならあります……が」

「なになに！」

「その……これは人によつては嫌な気持ちになるかもですが、それでも聞きますか？」

「ふふん！ 私に怖いものなどないわ！ 遠慮なくやつちやつて！」

あはは……元気100倍ですね、その内食べ物の名前のパン職人が出てきそうで怖いです

「では……ハルヒさん、少し手伝つてもらつてもいいですか？」

「もちろんよ！ ……で、なにすればいいの？」

「私の手を持つて……そうです。 あとは何か思い浮かべてください、それを当たしますから」

……あ、これは悪用は駄目ですよ？

他者の心は覗いてはいけませんから

「（実、私は皆——あなたは違うわよ！——がよそよそしくて悲しいのよ……それに、隠し事もしてるっぽいし……いや、隠し事がいけない訳じやないのよ？ ただ、中間外れにされてるような感じがして嫌なのよね）…………いいわよ」

「…………」

「ん？ 流石に無理だつたのか？」

「あ、いえ……そうでは無いのですが……うん、わかりました」

「ん？ 何がだ？」

「ハルヒさん、私は貴女に嘘を言いませんし、聞きたいことがあつたらなんでも答えますよ」

「……へ？」

あれ、違つたかな……皆が何かを隠していて、それが嫌だから云々だと思つたけど

「じゃ、じゃあ！ 皆に内緒にしている事は!?」

「……凄いストートですね」

「だ、だつて……びっくりしちゃつたから」

「そうですねえく……取り合えず……

私は人間ではありませんよ」

【キヨン視点】長門お!!　お前つてそう言う性格だつたのか!!

「え? ……人間じや無いってどう言う事? 何処をどう見たつて人間じやない…………」

「? 確かに見た目はそうですが、私はあなた達より遙かに長生きしていますよ?」

どうも画面の前の君、こんにちは。キヨンと言うあだ名の――  
――です……つておい! 名前くらい言わせろ!!

「なあ……長門、時音の言つている事は本当なの?」

「詳しく述べ解らない。だから正しい」

「つまりは長門さんでさえ解らないからこそ、時音さんの言つている事が正しいと言うことですか?」

古泉の質問に長門はこくんと頷いた。

……つてまでまでまで! これ以上やつかい事が増えたら流石にかなわんぞ!

つてか言つて良いのよ!?

「確かに……このまま涼宮さんが混乱してしまつたら、僕としては大変なのですがね」

「大丈夫ですよ、どのみちハルヒさんは忘れますから」

「そうでしたか……それよりも聞きたいことが山ほどあるのですが、答えてくれますか?」

「ええ、かまいませんよ? 私の知る限りの事でよければお答えします」

「では始めに、あなたは異世界人ですか?」

そう質問する古泉に、時音は残念な人を見る目で眺めていた

……つてそういうじやなくてだな!?

「……はあ、私は異世界人でも……ましてや宇宙人や超能力者、未来人

でもありませんよ」

まつたく……と言つた感じで答える。

……じゃあなんだ？ 時音はハルヒが言つたどれにも当てはまらないのか？

「では、あなたは一体……」

「私は只の半妖ですよ？」

「……は、半妖？ なんだ…その半妖つて？」

「半妖とは、親の片方に妖怪が居て、その血が入つて居る事を表します。…………まあ、私はそれ以外にも……」

ん？ 最後の方、何かを言つた様な気が…………気のせいかな？

「妖怪…………ですか、それはまたなんと言つたら良いか…………取り合えず敵では無さそうですね」

「……」ジイー

「？ どうかしましたか？」

「何の……」

「へ？」

え？

「何の……妖怪？」

「そこ気になる所！？ もつとあるでしょ!!」

「ううん……サキュバス？ ……いや、これは違うな、あの時ちやんと  
変えてもらつたんだから……ブツブツ」

「まともに答えなくて良いと思います!!」

「はあ……なんなんだ、一体」

「猫の妖怪なら……飼いたい」 キラキラ

「な、長門……お前そう言う性格だつたか？」

「長門さんの事はともかくとして、どうしましようか？ 機関の人間として答えるならば、怪しいの一言で済むのですが……」

「なんだ？」

「僕個人の意見としては、彼女程の存在が味方に居れば心強いですね」  
味方……か、果たして味方になるのやら。

ま、そこん所はハルヒがどうにかするだろう

「所でですね」

「はい、どうかしましたか?」

「朝比奈さんは大丈夫ですか?」

「え?」

「むきゅ〜……」

「朝比奈さああん!!」

「最初の方から気絶してましたが……大丈夫でしょうか?」「多分大丈夫だと思いますが……取り合えず椅子に座らせて置きましょう」

「そ、そうだな」

「そ、それにしても……時音さんが妖怪なんたらだつたとはな……そもそも妖怪は居ないと思つて——」

「猫の妖怪……なれる?」

「猫ですか? なれますがどうし——」

「連れて帰る」

「ちよいまでええ!!」

「チツ……何?」

「今舌打ち…………そんな事より時音にも生活があるだろうよ!」

「そう…………」ショボーン

「あ、あの…………長門さんが良ければ泊まりに来ても良いですよ?」

「そう」テーレツテレー

…………俺は長門が人間らしくなれて嬉しいと思えば良いのか、少し残念な人となつてしまつたと思えば良いのか良いのか……誰か教えてくれ

「う、うん……あれ、私……」

「ハルヒさん、おはようございます。 大変可愛らしい寝顔でしたよ?」

「なつ!」カアーーー

「さて、ハルヒさんも起きた事ですし、帰りませんか?」

「そ、そうね! それじゃあ鍵よろしく!!」

「ハルヒ……お前きつと疲れてるんだよ…………やれやれ

「では、私たちも……帰りましょうか？」

「そうですね、朝比奈さんはどうしますか？」

「俺がつる」

「キヨンさん、男の貴方に任せるとより女の方が良いと思いません…………？」

「ハイ、オモイマス」

「ふふつ……では、私の家で起きるまで居させますね」

「私も行く、なぜなら昔から知っている人がいる方が何かと便利だから」

「…………？」

「…………？」

「それではまた明日会いましょう」と言い、朝比奈さんをお姫様だっこで連れていく時音、それに着いていく長門の絵がシユール過ぎてどうしようもない

「…………ま、俺たちも帰るか」

「そうですね……僕は一応、時音さんの事を機関に話しておきますね」

「ああ」

さて、これからどうなる」とやら……

そもそも長門の事が気になつて夢に出てきそうだな……やれ

やれだぜ

「おや、楽しそうに笑いながらため息を吐くなんて、器用な事をしますね」

「だれのせいだと思ってやがる……」

「ふふつ……僕のせいですよね？ それ以外の人なんてあり得ませんよ」

「ふん……お前が悪いんだから責任取れ」

「ええ、喜んで……では僕の部屋に来てください、きつと良いことが起りますよ」

「ふん……」

## お泊まり会……準備編

さてさて、早くも放課後です。

(勉強風景とかその内書こうかな……)

あの日から一週間たちまして、ハルヒさん達とも仲良くしてあります。

ハルヒさんはあの事を綺麗に忘れてしまったので、ややこしい事にはなつていないと思いたい……

いや朝比奈さんから「マジック教えてください!!」と言われ、適当に教えたり

長門さんから「猫になつて」といきなり言われたりしたことはあります、別段ややこしいとは思いませんね。

はてさて、長らく語りましたが何を言いたいかと言うと  
「流石にそれは駄目だよ…………」

「ん? 大丈夫だつて、今までも持ち込んで来たんだから、駄目なら駄目つて言うでしょ?」

「そりや…そうかもだけど…………流石に『冷蔵庫』は駄目だと思います……」

何を思つたか、かなりでかい冷蔵庫を持ち込んできました……なぜ冷蔵庫を持つて来たのかと聞くと、近い内に学校でお泊まり会を開くらしいです。

……よく許可したね、先生方……

そんな事もあり、部室内はかなり綺麗に片付けられています。

「それにしても……まさか学校に泊まるとはな…………」

「そうですね……一応、花火とかは持ち込もうかと思います」

「まつたくだな…………やれやれだぜ」

ん? キヨンさんと古泉さんが何やら話しておりましね。  
きつと楽しみー! とかそんな感じのことでしょう。

「楽しみですね♪」

「……楽しみ」キラキラ

「やっぱり学校と言つたらお泊まり会よね!! そうそう、当日は一旦

帰つてから皆で行きましょう

「では何処かで集まりますか？ それとも自宅に迎えに？」

「ううん……私が皆の家を訪ねるわ！ 良いかしら？」

「私は大丈夫です」

女性陣は私の家を知っているので大丈夫でしょう

「男性陣もそれで良いかしら」

「ん？ ああ、大丈夫だ」

「僕も同じく大丈夫です……お泊まり会には色々と持つて来てもよろしいですか？」

「そちら辺は各自任せるわ！ ただし！」

「ただし？」

「見せられない物は持つて来ない様に！」

「見せら……！」 そんなもん持つてくるか!!

あはは……ハルヒさんつて隠さないです……そこはハルヒさんらしいですが。

「見せられない物つてなんですか？」

「大人の本と呼ばれている物」

「大人の本…………?!」 ボンツ

「……長門さんも隠さないですよね…………朝比奈さん大丈夫ですか？」 取り合えず椅子に座らせておきますね

「私は私だから…………」 キリッ

「そうですか……」

「所でハルヒ、風呂とかどうするんだ？」

「……あ、忘れてたわ」

「忘れるつて……お前なあ……」

「なら私が用意しましようか？」

「できるの？」

「はい、昔に作つた事があるので」

「へえ、凄いわね」

「そうですか？ 普通ですよ」

板繋げて完成ですからね、誰でも作れますよ

「あ、ならさ！ 大きく作れる？」

「大きくですか？ どれ位の大きさが良いですか？」

「皆が入れる位！ そしたら皆で入りましょうよ！」

あ、勿

論水着とかで隠すわよ」

……混浴的な事かな？

出来なくは無いけど……大丈夫なの？

主に朝比奈さんとか、朝比奈さんとか

……この人、見た目は大人なのに中身は子供ですから……あら、  
どつかの名探偵みたいですね

「――だから良いのよ！」

「だがな……」

「……あれ？ 二人ともどうしたんですか？」

「キヨンつたら恥ずかしくて嫌だつて言うのよ！」

「誰だつて恥ずかしいだろ！」

「恥ずかしいですか？ ……意外とウブなんですね

「なにつ!?」

「別に裸を見られる訳でもないので恥ずかしいとは思いませんよ？  
ほら、プールだつて水着じやないですか」

「確かにそうだが……はあ……わかつた」

「よしつ！ 良くやつたわ！ 流石は私の秘書ね！」

「ふふつ、お褒めの言葉、ありがとうございます」

「ぐつ……ハルヒに加え、時音さんまで加わるとは……」

「涼宮さんの味方と言う証拠だから良いと思いますよ？ それに、皆

さんと絆を深めるチャンスですよ？」

「……確かにそうだが……女共の見た目が良いから目のやり場に  
困るだろうな」

「そう言う時は堂々と見ればよろしいのでは？」

「お前は……はあ……最近ため息が増えてきた気がするぜ」

ヒノキ風呂で、お風呂からいい匂いが出るようにしたら楽しめるかな?

ラベンダーとか……抹茶とか……イチゴとかも面白いかも?

## お泊まり会……行動編

最近暑くなつてきましたね、天草時音です。

今日は前々から予定していたお泊まり会の日です。

そして、ハルヒさん一行を自宅にて待つている所です。

「本当に学校に泊まるのか？」

「はい、教員からも許可を貰いましたから大丈夫ですよ？」

「そうか……ならば、沢山楽しんでこい」

「わかっていますよ」

我がお父様は心配性にて、気にならない程度に聞いてくるんですよ  
……世の親はこんな感じなんでしょうかね？

びんぽん……びんぽん

「あ、はい！…………あ、ハルヒさん方。 ようこそいらっしゃいました、少し待つてくださいね」

「ああ……うん」

？

ハルヒさんの様子が少しおかしいですね……  
何か有つたのかな……

……ま、気にしてわからぬし荷物を早く持つて行かないと！

…………さて、こんなものだし、待たせるのも悪いから早く行かな  
きやね

「お待たせしました」

「ん、全然待つて無いわよ？ それよりも凄い家ね……」

「そうですか？」

そんなに凄いですかね？

敷地はそこまで広くは（約2500位です）無いですが、家が少し

大きいですから、そう思うのかもしれませんね。

「そんよ、それにキヨンの家が2～3個入りそうじゃないのよ

…………ま、良いわ！ 早速向かうわよ！」

「そうだな、所で古泉は大丈夫なのか？ スッゴい汗だくなんだが……」

「ぼ、僕の事は気にななくて大丈夫です……それよりも早く向かいましょう」

「…………なんだつたんだ？ そんなに楽しみだつたのか  
ただ純粹にお父様が怖いだけなんじゃ……」

「そういうえば朝比奈さん、その鞄には何が入っているのですか？」  
「これですか？ 趣味のお茶やお菓子です♪ 皆さんと一緒に食べようかと思つて作つて来たんですよ！」

「そうでしたか、楽しみですね」

「はい！ と元気良く返事をする朝比奈さん。  
そしてお菓子の時にドヤ顔をしていました。

「ちなみに私は花火とかトランプとかね、皆で遊べる物を中心を選んで来たわよ」

「花火も楽しみですね♪」

「うんうん……あ、時音は？」

「私は『呪符』や『式符』と―――あ、冗談です。 本当は花火ですよ？」

「あ、そうよね。 ………………真顔だつたからビックリしたわよ」

「…………本当の事ですと今さら言い出せない

ま、花火も持つてきたので大丈夫ですよね

「ゆ、有希は？ 何持つて來たの？」

「望遠鏡」

「有希らしいしわね」

「あとは枕、変わると寝れない」

「…………有希つてこんな性格だつたかしら？」

「キヨンさん、キヨンさんは何を持ってきたのですか？」

「ん？ 無難に花火だな、古泉も花火だが……あいつは打ち上げ花火  
だつた」

「…………花火率高いですね、まあ…私は色々と出来るのでなんとかなるでしようけど」

「気になつてたんだが、聞いても良いか?」

「はい、答える範囲なら答えますよ?」

「時音さんって半妖つて言つてたが、本当なのかな?」

「ええ、本当の事ですよ。 ちなみにお父様が人間でお母様が妖怪です」

妖怪…………隙間妖怪の紫色のバーバー「そんな汚い言葉言つちやいけません! それに私の見た目の何処をみて年寄と言つて ブツブツ」——何処からかなにかが聞こえた気がする……氣のせいかな?

「妖怪…………ね、会つた事は無いが実在してましたとはな」

「妖怪がこの世界から消えたのは人々が妖怪の事が脅威ではなくつたからです。 でも中にはまだ残つている者達もいますよ、そう言うのは人々の噂とかが繋ぎ止めているんです」

「なるほどね、じゃあ口裂け女何かはそうなのか?」

「ええ、彼女の様に伝えられている妖怪はまだこの世界にいます。ですがそうでない妖怪は、残念ながらこの世界に住んで行けないのです」

「…………この世界に、と言うと違うところに居るのか?」

「ええ居ますよ、ですがそこが何処なのかは教えれませんけどね……」

もし知つてしまつたら記憶を消すか向こうの住民になつてもらいますので

す

「分かつた…………さて、話していたら学校に着いたな

「ふふつ…………そうですね」

妖怪は元々は人々を襲い、人々を食べて生き長らえていた……  
ですが――いえ、今は必要ありませんでしたね この物語には

「あ、皆さん」

「あら? 古泉くん?」

「お先に向かわさせて頂ました、色々と確認もあつたので」

「そお? なんか悪いわね……」

「ええ、お気に為さらず、では部室に向かいましょうか」

「ええ、そうしましようか！」

「楽しみですね～……学校に泊まるのって初めての事なので緊張してきました……」

「あら、初めてだなんて、経験者かと思つたわよ」

「いえいえ……初めてなので優しくしてくださいね？」

「まつかせなさい！」

「どうしよう古泉、俺の心は汚れているかもしねれない」

「奇遇ですね、僕も丁度同じことを思つていましたあ  
「…………持つのか俺の良心は」

「持つとイイデスネー」

「…………やれやれ」

## お泊まり会……食事編

「よい……しょつと……ハルヒさん、終わりました」

「お、ありがとね！」

皆さんこんにちは、天草時音だ。

今……正確には終わつたんだけど、部室内の整頓やらなんやらをパ  
パつと済ませました。

「……こつちも終わつた」

「後は布団を敷くだけですね」

「ああ……お、そろそろ昼時だな、一旦メシにするか？」  
「そうですね、私もお腹がもう限界です……」グギュルルル  
「……ならさつさと作つてしまいましょう？ 誰かさんは待てなさそ  
うだし」

「はう……」カアー

うんうん、食材は持つてきたから大丈夫だと思うけど、何を作るか  
決めないで買ったからまとまりが無い……

「さて、男子達は此処部室内を任せるわね、私たちはお昼ご飯を作つて来るか  
ら」

「おう、任せとけ」

「ええ、お氣をつけて」

「……何を作るか決めていますか？」

「そうね……無難にカレーなんてどうかしら？ こういつた事の定  
番でもあるし」

「カレー」キラキラ

「ふふつ、長門さんは食いしん坊ですから、いっぱい作らないとですね

♪

「え、そんなに食べるんですか？」

「はい、外での活動時の休憩の時に沢山頼るので……量的に言えば大  
食い選手さんとほぼ同じですね♪

な、なるほど…………

「一体この体の中の何処に入るのかな……  
見た感じ私より食べなさそうなのに  
？」

「あ、いえ。お気に為さらず」

「そう……後でモフモフの刑」

「うえつ!」

「ん? どうしたのよ、急に大声なんて出して」

「ああ……いえ……」

「そお? まあ良いわ、さっさと作つてしまいましょうか」と、言うわけで作り始めた訳であります。

最初の方はまとも……と言うとあれですが、しつかりと作つてたのですが、後半になるにつれてカレーに絶対入れないだろうと言う物までいれ始めたハルヒさんとそれを横目で待望の眼差しで見る長門さん、さらにその横で真剣に具材を切つている朝比奈さん……となり始めたのです。

「……流石に『それ』は不味いと思いますよ」

「そうかしら? 意外といける様な気がするわよ?」

「いやしかし……」

「えい」

ツボトン

「…………い、色が変わつてきました」

「ま、私にかかるればこんな物よ!」

「あ、あのぉ……カレーって茶色い色をしているのでは無いんです  
か……どう見てもこれは……」

「Craazy」

「発音良いですね……つてそうじゃないです! 色です色! なんでも  
『赤色』なんですか!? 一体何を入れたら――」

「唐辛子」

「そうでしたね……」

「大丈夫よ、こんなもん色だけよ色だけ、そんなに辛くは無いわよ」  
本当かな……そこらの 激辛料理より赤いですが……と、

ともかく！ これは危険過ぎる——

「あ、本当ですね！ そんなに辛くは無いです！」  
「でしょ！」

——筈なんだけど？

……え、辛くないんですか？

皆してグルじや無いですよね？

新人弄りてきなあれじや無いですよね？

いくら私が半妖と言つても味覚は人間と同じなんですよ？  
そこら辺わかっていますか？ お三方？

「ん……」

「え……食べろと仰いますか……？」

「見た目ほど辛くない」

「し、しかし……」

「もう！ ちやつちやと食べる！」

「うぶつ!?」

ぐつ！ か……か？

あれ、全然辛くない……

寧ろ美味しいかも

「どうどう？」

「……美味しいですね、少し辛いですが見た目ほど辛くは無いです。  
寧ろそれが良いですね」

「でしょ！ さて、作つた事だし運ぶわよ！」

「わかりました！」

さてさて、男性陣はどんな反応をするのかな？

すこし楽しみになつてきた——つて、私はこんな性格だつたかな

……ま、良いか

「へいっ！ カレー持つてきたわよ！」

「おや、カレーですか。 こう言う時に食べるカレーは大変美味しい  
ときk……」

「ん？ どうした古泉…………つて、なんだソレは」

「カレーよ？ 心配しなくても味見はしたわ！」

「本當か？ かなり赤いぜ？」

「何よ、私の言つている事が信用できないつて言うのかしら？」

「お前はイタズラするときは平氣で嘘をつくだろうが…………」

「それはそれ、これはこれよ」

「あの、味見は本當にしましたよ？」

「…………はあゝ……分かつた、食べよう。ほら古泉、しつかりしろ」

「つは！…………失礼しました、では頂きましようか」

「「「「「いただきます！」」」」

パクつと…………先程も食べましたがやはり美味しいですね、入れた唐辛子に秘密が？

調べるにも、持つてきた唐辛子を全部入れたから確認の仕様が無いですね…………つと、食事時に食べ物の事以外は考えないようにしましょう。

すぐに終わつてしましますからね

「確かに…………うまいな」

「ええ、正直に申し上げますとお店を開ける程ですね」

「そんなに美味しいかしら？」

「お店は行き過ぎだけど本当に美味しいですよ？」

「…………きっと皆で食べるからよ！ 海の焼きそばは普通だと不味いけど場所とかでおいしく感じるし！」

「おいおい…………全部の海の家の焼きそばが不味い訳がないだろう、たまに旨いのがある」

「それでもたまになんですね」

「…………」バクバクゴクゴク

ほ、本当に何処に入るのかな…………

食べてすぐに消化されて栄養に回つてるとしか考えられない…………

## お泊まり会……始動編

「ふう……ん？」

「どうかしましたか？」

「あ、いえ……何か物音が聞こえた気がしましたが気のせいでした」「そうですか？」

どうもこんにちは、天草時音だ

前回の最後

あの後、食器やら何やらを片付けている最中に下の方から物音が聞こえたんですが、キヨンさん達は部室に居るしハルヒさんは私と一緒に洗い物をしているので、単なる勘違いですね

「さて、片付けは終わつたし戻りましょうか」

「そうですね、キヨン君達は何をしているのかな？」

「さあ？ 行つてみたら分かるわよ」

「……」クイクイ

「ん？ どうしましたか？」

「後で話がある」

「？」

「取り合えず帰還する」

「？ わかりました」

なんだろう……まさか食器の洗い方が雑とか遅いとか言われるのかな……

い、いや！ これでも毎日炊事洗濯はやつて居るんだしそれは無い！

ううん……と、なると……なんだろう？

そうこう考えている内にどうやら部室に付いた様ですね

「たつだいまー！」

「おう、おかげり…………なあ、さつき変な物音がしたが何かやつてたのか？」

「え？ 別に変なことはしていないわよ？ そもそも此処から調理室ま

では離れてるじゃ無い」

「それもそうか……んじや氣のせいだな」

「全く……気が緩んでるんじや無いでしようね？ そもそも——  
ドンツ！」

「……俺の気のせいじやなかつたら何か物音がしなかつたか？」

「……氣のせいじや無いわよ」

「この音……先程よりも大きく無いですか？」

「古泉、お前またなんか企んでるのか？」

「全くの無実ですよ、それに……僕は夜に花火をすること位しか企んでいませんでしたよ」

「そうか……」

「この音つて……下から聞こえますよね」

「そう……でも私達以外の人間は居ない」

「ううく……怖いです……」

「みくるちゃんは此処に居なさい、キヨンと古泉君はみくるちゃんの側に居てあげて……私と有希、時音で調べて来るから」

「わかりましたが、くれぐれもお気をつけて」

「大丈夫よ、危ないと感じたら戻つて来るから」

……これ、危ない事決定なんじゃ？

ハルヒさんは無意識に何かを作れるつて古泉さんと長門さんが言つてたし……そのハルヒさんが危ないと感じたらなんて言うのは……

＊一階フロア 階段付近＊

「ううん、どつちかしら？」

「音の発生源はこの一階の何処かの筈です、くまなく探ししますか？」

「そうね、もしかしたら何かあるかも知れないし」

「それなら手分けして探しませんか？ 2チームで探した方が早いですし」

「そんなの危険よ！ 皆で固まつて動いた方が良いわ」

「大丈夫ですよ、少しは武術の心得がありますから。

さ

て、ハルヒさんと長門さんチームと私の2チームで探しめしょう?」

「…………分かつたわ、でも無理は駄目よ?」

「……」コク

「ふふつ…………では、一旦別れましょう」

「氣を付けてね、と言いハルヒさんと長門さんは音の原因を探しに行つた。

さて、一階に降りた途端に微弱だけど妖怪の氣配がするのは氣のせいじやないよね

「ハルヒさんはわからないけど、長門さんは絶対氣付いて居る…………さて、向こうからどうやって来たのか分からなきけど、丁重にもてなして帰つてもらわないとね」

私は戦闘が苦手なのに…………ま、困つたら式神に頑張つてもらおうかなう……

#### †一階フロア 音楽室†

「なにも無いですね…………」

ピアノとかその他の楽器はあるけど…………氣になる物は何も――ん? なんだろうこれ…………

五角形で手のひらサイズのプレートの様な物がピアノの下に落ちていた

「なんでこんな所にこんな物が? 取り合えず持つていましょうか、何かの手がかりになるかもですし」

…………それよりも、なんだかさつきから目線を感じるけど特に姿が見えない…………

もしかしたら【ナニカ】が私を見張っているのかもしれないね

…………そうなると、ハルヒさんチームにも着いている可能性が高い…………か

…………ま、取り合えず消しありますか

「ナニカさん、私はこそそと見られるのがあまり得意では無いのです。なので消えてもらいます。虚閃<sup>セロ</sup>」

ナニカが要るであろう方向に人差し指を向け、虚閃を放つ。

「グギャアア……」

虚閃がナニカに当たると小規模な爆発等は起こらず、そのナニカは跡形も無く消えた。

「しかし……やっぱり妖怪ですね」

うくん…………報告しに行つた方が言いかな?

でも、朝比奈さんの所には超能力者が居るし、ハルヒさんの所には宇宙人。

…………うん、このまま探索を続けましよう

少し妖怪が哀れに思つたけど、こんな所にいる方が悪いとかなり自分勝手な考えで考えるのを止めた。

「さてさて……賢者達は何をしているのかな? こんな事になつているのにまさか気付いて居ないと言うのかなあ……」

†何処かの世界†

「ぶえつくし!!」

「風邪ですか? 一様

「その様ね……あ、でも、もしかしたら何処かのイケメンが私の事をうわす」

「はいはい、そんなことはあり得ないので医者に見てもらいましょうねー」

「最近――が冷たいわ……」

「何言つてるんですか、これも愛情です」

「そうかしら……」

## お泊まり会……収束編

「グヘヘヘ！ オマエラ！ ヤツチマウゾ！」

「「「オオオオオオ!!」」」

「はあ、面倒く s 疲れて来ますね……」

「そう……頑張つて」

「長門さん…………助けてくれても良いのですよ？」

無理 と長門さんは無機質に、だけどしつかりと答えてくれた。  
……まあ、気絶したハルヒさんの防衛で忙しそうですし、仕方ない  
ですね……

†時は少し遡る†

♪数時間前♪

「どうしようつかな……」

「ここにちは、天草時音だ

このプレート……調べてみたら裏側？ に小さく『火は水に勝てず  
水は木に勝てない』と書かれていました。

…………どゆこと？

属性に関する事なのは分かるけど、何を指して書かれているのかわ  
からないです

「取り合えず…………もう少し探してみますか」

ま、音楽室には何もないと思いますけど……

さてさて……何処を探しに行きましょうか。

……プレートが何かのカギになることは何となく分かったので、こ  
れ……もしくはこれに近い物を探しにいきますか！

「こんなにちはく……つて、誰も居ないよね」

「……そう」

「うひやい！……つて長門さんにハルヒさんじや無いですか……どうして此処に？」

「さあ？ 歩いたら此処に着いたのよ」

歩いたら？ まさか迷子……は無いし物理的に無理ですね……だとすると何かしらの力が働いている？ 一体誰がそんなことを……

「あ、 そうだ」

「ん？ どうかしましたか？」

「これ拾ったのだけど何なのか分からなかしう？」

「これは……」

私が音楽室で見つけたプレートにそっくりですね……？ でも色が違いますね

私が拾ったのは少し茶色でしたし……

これは、薄い水色ですね

「これを何処で手に入れましたか？」

「図書室で見つけたのよ、初めは備品かと思つたけど、見たこと無かつたから持つてきたの」

「ふむふむ……？『全ての証を手に入れし者』と書かれていますね」

「全ての証？ これが何個もあるのかしら……取り合えず部室戻りま

s——

ドンツ！ ドンツ！ ドンツ！

「ひつ!? な、なに!？」

「つ！ ハルヒさん！ 私の側に！ 長門さんもです！」

「分かつた」

「い、いつたいなにが……」

「良いから早く!!」

「キシャアアアアアアアア!!!」

「な……何あれ!?」

「こいつは……妖怪か、しかし此処まででかいのは……」

大きな音と共に現れた異形の怪物——ぶつちやけ妖怪……簡単に表すなら蜘蛛くもと蠍さそりが混ざった様な見た目をしている。

ぶつちやけ氣色悪いしキモい、早々に退場してもらいたいですね……しかし

「あ……あ……」ガクガクブルブル

ハルヒさんの方を優先した方が良さそうですね

「長門さん、ハルヒさんのサポートをお願いします。私はこのよく

分からぬ妖怪の相手をしますので」

「分かつた……無理は禁物」

「ふふつ、わかっていますよ…………さあ、私が相手をしますのでどうぞよろしく」

「ワレ オマエ コロシユ！」

…………随分と可愛いたしやべり方ですね

「ユケエー！ ワガテシタドモ！」

「グヘヘヘ！ オマエラ！ ヤツチマウゾ！」

「そして時は戻る」

「ウフ♡ アナタヲ ワタシノ ミリヨクデ ホネヌキ♡」

「……キモい」

なんか目の前に現れた厳つい禿げた人形の妖怪がオネエ口調?で喋りだし思わず言つてしまつた

「ウォラア!! ワタシガ キモイ ワケ ナイダロガアアアア!!」

「…………参ノ型」

相手が悠長にポーズ（腰に手を置いてもう片方の手を私に向けている）で話していたので、刀を取りだし

「ブツトb——」

一気に相手の首目掛けて斬撃を飛ばす

この技はシンプルながら隙が無いので便利ですよ?

皆さんもどうですか？

「フン アイツハ シテンノウ ノ ナカデモ サイジヤク」

「ステニ オレラ ノ ジュンビハ バンタン！」

「ピヨピヨ！ ピヨピヨピヨピヨ！ ピヨオオオ!!」

「ミナノモノ！ カカレエエエ!!」

うおーつて言いながら数十名が走つて来た……いや、少し気になるけど私はツツコまないよ

「はあ……面倒くさいですね」

「……来る」

「……？ 何がで s——」

「なーがーとーさーんー!!」

行きなり何もない空間から青いロングの女性が長門さん目掛けて飛んできたんですが、仕様ですか？ そうですか…………って、たしかこの人委員長の…………

「ふふう♪ 長門さん！ 朝倉涼子！ あさくらりょうこただいま参りました！」

「ん……敵の殲滅」

「了解しました！ ————— 滅びのバース○○トリーム!!」

……なんだろう

取り合えず何か唱えたと思つたら片手を前に突き出して毛の平を妖怪達に向けたと思つたら青白い光線がでた

「ふん、塵の分際で私の長門さんを見た罪は、万死に値する！」

……長門さん！ 私やりましたよ！」

「…………よしよし

「むふう♪」サワサワ

訳が分からぬよ…………取り合えず妖怪は全滅、ボス的なあのキモイ妖怪は逃げた様だけど、あの傷（足が数本無くて蠍の尻尾はちぎれている）だと長くは持たないし、放つて置いても良いかな

「はふう♪ サワサワ……ピタツ…………？」

「？」

「……見てた？」

「はい」

「そ、そ……見たのね……ぐす……うわあああん！」

「あ……行つちゃつた、なんだつたんだろう？」

「…………気にしては駄目」

「はあ……」

取り合えず朝倉さんの事は忘れた方が良さそうですね、彼女にも色々と事情があるんですよ……ええ、そりやもう、抱きつきと共に長門さんの太ももを撫でる位に……

「んう……あれ、私……」

「あ、起きましたか？ 何処か怪我とかはありませんか？」

「怪我とかは無いけど……さつきの怪物は？」

「あさく……ヒーローが助けてくれて、擊退に成功しましたので安心して大丈夫ですよ」

「……ねえ、これって現実なの？ それとも私の夢？」

「残念ながら現実ですよ」

「そつか……」

うくん……なんだかハルヒさんは落ち込んでいる見たいですね

…………取り合えず慰めておきますか

少し抱きしめて

「大丈夫ですよ、妖怪は撃退しました。 ハルヒさんが何にたいして落ち込んでいるのかは分かりませんが大丈夫です。 次来たら塵ひとつ残さずに消しますので……ですから安心してください」

「……うん」

な、慰められたかな？ 結構なに言っているか分からぬけど、なんとかなつたのかな……

「…………部室に帰還する」

「……そうね、キヨン達の事も心配だから一旦戻りましょうか」

「ええ、では……私が先頭を歩きますので着いてきてください」

「所での怪物は妖怪なのね……」

「ええ、自然に生まれた野生の混合種でしたね」

「そんな事まで分かるの？」

「え？ だつて蜘蛛と蠍の特徴を持つてたので」

「そ、 そ、 う、 な、 ん、 だ、 て……」

## お泊まり会……花火大会編…………？

「——と、言うワケだつたんです」

「そ、そんな力が……私に……」

こんにちは、天草時音だ

あの後、部室までは何事も無く戻れました。

……しかし、このプレートはなんだつたんでしょうね？

もしかしたら、まだ終わつて無いのかもしません

「しかし、妖怪ね……何が原因なんだ？」

「恐らくは涼宮さんの力によるものでしよう、何かしらのイベントがあればと思つたとか」

「そうか……それで、ハルヒはなんで落ち込んでいるんだ？」

「ああ、時音さんが今回の事と涼宮さんの持つ力の事を教えたそうですよ？」

「はあ!? そ、それでいいのかよ!?

「機関のメンバーから言わせてもらうと良くはないですね、教えた結果何が起ころるかわからないとので……でも、僕個人としてはたいして気になりませんね、その方が人生にスペースがあつて楽しくなるかな、程度に考えていますよ」

「…………それで良いのかよ」

「ね、ねえ……私はどうすれば良いのかな……?」

「ううん……力が要らないなら捨てれば良いのでは?」

「す、捨てるつて……」

ハルヒさんは色々と考えている見たいですが、私に比べれば可愛い物ですね。

一応、常識を変えれる見たいですが規模が地球上のみですし、力の発動もいまいち、それから変な閉鎖空間に関しても何がしたいの? 状態だし

…………え、私の力はどうなんだつて？

それはあれですよ…………禁則事項です♪

あつ！ 待つてください謝りますから帰らないでくださいっ!!

………… 実は言うと、私のこの力を全て把握しているかと言われると首を横に振らざる逐えないんです。

気づいたら力を持つていて、気づいたら人間じやなくなつていまし  
たから……

それでも気にせず生きてきましたけどね（ぶつちやけると私よりお母様の方が何倍も怖いし強いので……え？ お父様ですか？ ……いざつて時は強いですね、いざつて時は）

「——ね！ 時音！」

「んう？ ああ……『免なさい、考え方をしていました』

「全く……しつかりしなさいよ？」

「ごめんなさい……あ、それでどうかしましたか？」

「私の持つている力は捨てない事にしたわ、今までは自覚してなかつたから皆に迷惑かけていたけど、自覺したしもう迷惑はかけないかなつて」

「ハルヒさんらしいですね」

「私らしいって何よ？」

「いえいえ、気にしないでください……ええ別に大したことじゃ無いので、本当に」

「気になる！ そう言わると逆に気になる！」

「……なんだかいい方面に傾いた様だな」

「その様ですね、しかし……」

「ん？」

「あ、いえ……少し気になつた物ですから」

「何がだ？」

「時音さんはあまり気にしていない様だと思つてしまつて」

確かに……こいつの言うことは一理あるな  
……たしか、前に半人だと言っていた様な……だとすると時音  
もハルヒと似たような存在なのかもしれないな  
はあ……やれやれ

「あ、そうだ！」

「あ？ どうかしたのか？」

「花火大会をしましよう!!」

「花火大会……？」

私は持つてきていませんが、大丈夫でしょうか？

「んなこと急に言われてもな、俺は持つてきて無いんだが？」

〔古泉の鞄付近〕 「大丈夫よ！ こんな所に大量の花火セットがあるから！」

「古泉いいい!!」

「あはは…………では外へ向かいましょうか」

古泉さんは用意周到ですね、つてか私はなんやかんやすれば自力で花火つぽい物を作れるんですよ……作ろつかな～……

「…………そんな事も在ろうかと」

ドドンッ!!

「用意した」

「流石は有希ね！」

「あ、あのお～…私も一応持つてきていますよ」

「居たのね、みくるちゃん…………」

「ひ、ひどいです…………」

「じょ、冗談よ！ 冗談！ ね！ キヨン?!」

「俺にふるなよ！ ……ああ～…朝比奈さん？ ハルヒはこう言うやツだから気にしたら太りますよ～？」

「気にしません！」

「早いわね…………」

…………デカイ、すごくデカイ

何処とは言いませんがすごくデカイです

私のに比べ、倍くらいあります…………すいません盛りました。

「さ、そろそろ行きますよ？　あ、外は寒いのでしつかりと上は着てくれださいね」

「わかりました」

「移動はカット！」

「…………これは一体」

「やつぱりまだ終わって無かつたんですね」

「その様ですね……涼宮さん、後ろに下がっていてください、ほら貴方も」

グラウンドへ到着したのだけど、いざ見ると先程逃した妖怪とその他大勢…………ざつと見て数百はいる妖怪の群れを目撃しました。

「はあ～…………疲れるよ」

「ドンマイ」トントン

「…………すみませんお二一方」

「？」

「僕は閉鎖空間内でしか力を使うことが出来ないのでバツクアップ…………涼宮さん方の近くに居ますね」

「…………」ダバアア

「大丈夫、私がついてる。　あの役立tて人間が居なくとも問題ない」

「な、長門さん……」ウルウル

今の中門さんが女神かなにかに見える……

「バツクアップは任せて」キリッ

気がしましたよコンチクショ一

「う…………うわああああ！」

「気づかれた…………此処は任せる」

「うう……」

じあの、そう言い長門有希は後ろに……正確には涼宮ハルヒらの所に向かつた。

そして、泣き声に気づいた妖怪らが一斉に天草時音へと向かつた……このままでは殺られてしまう、ハルヒと朝比奈みくる『だけ』そ

う思った瞬間

「ギシャアアア——ギヤツ!」

天草時音まで後少しの所で『全ての』妖怪が何かに怯える様に止ま

り、全ての妖怪が天草時音を見ていた。

「どうして……どうして最終的には私が…………そもそも…………そも

そもお前ら妖怪が此処に居なければこんな事にはならなかつた」

そして、数百の妖怪を見るその顔は——

「お前ら全員……生きて帰れるとと思うなよ」

地獄さえも可愛く思えれる、壊れた様な笑顔だつた

## お泊まり会……戦闘終了編

相手は弱い……かといつて簡単かと聞かれたら首を横に振らざる  
おえない

なぜか……単純に数が多いからだ。

……まあ、範囲魔法撃てばすぐ終わるんですけどね？

しかし、私作  
者が出来ないんです。  
偉い人はそれが分からんとです。

「…………さて、そろそろ始めましょうか？」

そう言つた途端、止まつた妖怪達が一斉に動き出した  
ある者は正面から

ある者は左右から

ふつ、私には108もの奥義が…………無いですね、奥義の欠

片もありません。

なので、魔法とかで戦いたいと思ひますです。

氣を静める…………そうすることで体内の魔力を安定させ、使いやす  
くする。

クルクルクルクル

そしてそれら魔力を一斉に敵陣にばらまき……爆発！

ドゴオオオオオン!!

大気中の空気が揺れ、地面が割れるんじゃないかつて程の爆発が起  
こつた。

これにより、3割ほど削ることに成功

「……す、すごいですね……まるで映画を見ている感覚になりますよ……」

「……だな」

後ろで何かを言つていますが無視です無視、3割削ったからと言つても、敵の数は数百程……微々たるものです

…………どんどんいきますか

「無限装弾虚閃！」

ゼロ・メトラージュッタ  
手を銃の形にし、指先から無数の弾幕を張るこの攻撃は、とある灰色の世界1の称号を得たが孤独を恐れた一人の男の技

「今度は蒼い光線！ 淫すぎるわ！ 私もうぢだい！」

「す、涼宮さん！ 平常運転なのは良いですが落ち着いてください！」

涼宮さあああん！！

何やら後ろが凄く騒がしいですが無視です  
こちとらそれ所じや無いのです

無限装弾虚閃で約半数者妖怪を蹴散らせましたが、何やら嫌な予感  
が……

「クツ！ オマエラ！ ヘンシングダ！」

「「「オウ！ ヘンシン！」」

「……変身してもたいして変わつて無いじやん」

「コウイウノハキモチノモンダイダ!! イクゾオマエラアアア!!!」

変身して何か変わつたのかと思つたら色だけ、それもかなり近い色になつただけ……

せめて何処かの世界のヒーロー見たいに変わればいいのに

……

さて、そんなに呑気に考えてては殺られてしまいますが、リーダー格が『全員』に突撃命令を出したので

……はあ、面倒です

「オーバーソウル・フランドール・スカーレッド」！

フランドール・スカーレットとは、幻想きな郷に佇む紅い洋館の地か深くに500年近く閉じ込められた存在……そして

『きゅつとしてどつかーん♪』

「グキヤ——」

「ギシャ——」

「ナツ!? ナゼバクハツシタ!?

この状態で『きゅつとしてどかーん』とされた者は爆発して死ぬ。あ、ちなみに『きゅつとしてにゃーん』もありますよ?

これは相手に猫耳とプ○グ（バ○ブ式）付き猫尻尾が着きます……え？ プラ○（バイ○式）付き猫尻尾は何処に着くかって？

……恐れ多くて私の口からは言えません、なんでしたら試しますか？

きつと新たな扉を開けますよ…………まあ、私はおすすめしませんが

つと、関係ないことを考えていましたね。

今は目の前の敵を倒すことにしましょう

『禁忌「レーヴアテイン」!』

レーヴアテイン、濃い紅色に棒状の神話の武器。

これはそれをモチーフにしていて、見た目は似ているけど性能が違います。

まず、50個程の調理器具は勿論の事。

全てのテレビに対応した万能型のリモコンと持っているだけで暑さ、寒さ等の気温を持ち主の最適な温度に変えてくれる温度計に水・食料品等が無限に涌き出てくる冷蔵庫等々……様々な機能が着いているのです！

お値段なんと100億円！

今ならよく分からぬ見た目の妖怪も沢山つけてのこのお値段!! さあ！ 今すぐお電d——ごめんなさいふざけました許してくださいお願いしますから右手に持っている鈍器の用な物体をおろしてください死んでしまいます

……………気を取り直して

『すぐに壊レナイデネ?』

敵陣に突つ込んで切る

上からしたに勢いよく振りかざして真つ二つにしたり、横に振つて数名の上半身と下半身を切り分けたり

そんなこんなで相手はリーダー格とその取り巻きの2体を残すのみ

「残るは3体のみ…………ですね」

「クツ……」

「ググッ……ウオオオオオ!!」

緊張感からか一体が槍を構えて突撃してくる……ってかなんでこの3体だけ武器持つてるの？ 武器持つのにランクとかレベルが必要なの？

そんな事を考えてたら槍持ちが武器を振りかざしていたので、横に避けてレーヴアテインで切る

……そう言えば切った後が焼けているのはこレーヴアテインれの効果なのかな？

まあ血が出ないから良いのだけれど

「さて、今なら降参も聞きますよ？ あ、勿論のそれ相応の態度でし——」

「オレガニンゲンニアタマヲサゲルカアアアア!!」

「はあ……せめて楽に死になさい」

残りの2体が同時に攻撃していくので、レーヴアテインを『数倍に増やして』貫いた。

「ふう……これで終わりですね」

服とかに着いた砂ぼこり等を払いながら回りを見渡す

……何故かモザイクがかかってる敵だつた物が大量にありますね

「…………あ、涼宮さん達は大丈夫ですかね？」

そう思い涼宮ハルヒ達が居る場所に向かうのであつた。

「ねえ——？　あの抜け出した雑魚はどうなつたの？」

「——様、あの者供は——様の娘様が倒しました」

「そう…………気が変わつたわ、そこに案内しなさい」

「よろしいのですか？」

「勿論よ、此処の人達は私が居ないと仕事が出来ないん用な腑抜けでは無いからね」

「はあ…………それでは捕まつてください、直ぐに向かいますので」

「はあ——♪

時音に会うのは久し振りかな、怒られない  
と良いけど……」

「ん？　何か言いましたか？」

「いいえ…………それよりも早く行きましょ♪」

「うわっ！　——様！　抱きつかないでください！」

「ええ？　いいじゃんか？」